静岡 沖縄を語る会

第５５号
２０２２年１０月６日（木）
清水市西久保３００の１２
富田英司
ゆうちょ口座
静岡・沖縄を語る会
００８９０－１－１５２７７０

玉城デニー氏　権力あげての猛攻をはねのけ 歴史的大勝利！
辺野古新基地ストップ！　県民の民意は１ミリも揺るがない！
誰ひとり取り残さない沖縄！沖縄を二度と戦場にさせない！

☞９月８日「うまんちゅ総決起大会」でのデニーさん、カイザさん。壇上には挨拶をした高校生・若者代表の姿も。四度（たび）ポールは日本（ヤマト）に投げられた。

（撮影：山城博明さん、写真提供：高良　勉さん）

☞「ガマフヤー」の具志堅隆松さんがハンストを、8月14、15日、東京・靖国神社前で行った。“遺骨が海に棄てられようとしている。戦没者の尊厳が損なわれようとしている。そのことだけでも知って欲しい”と。基地建設に南部土砂使用は「二重、三重に戦没者を冒涜」することだ！

写真提供：木元茂夫さん（ファイト神奈川）

☞９月17日、沼津市今沢海岸で日米共同訓練。海自の LCAC2105、2106（ホバークラフト型揚陸艇）が訓練開始。ビーチングを繰り返した。

沖縄県知事選で玉城デニー氏がみごと再選を果たす！

今年の沖縄は選挙の年で２月の名護市長選から「オール沖縄」の候補が負け続けていた。それだけに、９月１１日投票の県知事選はどうなるか心配であった。

１１日（日）の夜、知事選の結果が気になってテレビの前に座っていた。午後８時の投票締め切りと同時にＮＨＫをはじめ各テレビ局が玉城デニー候補の当確を打ち出した。その後、沖縄の知人から勝利報告が届いた。

以下は沖縄の知人からの「沖縄県知事選」報告を紹介する。**富田英司**（静岡・沖縄を語る会）

「県民は辺野古ＮＯ！貧困ＮＯ！沖縄の自立した発展！」を突きつけた。

９月１１日投開票の県知事選挙の結果は約６．５万票、１０ポイント近くの差をつける勝利だった。

開票結果は次の通り。今回と前回を比べてみよう。

＜２０２２年＞

有権者数　１，１６５，６１０
投票率　５７．９２％
玉城デニー　３３９，７６７（５０．８％）
佐喜真淳　２７４，８４４（４１．１％）
下地幹郎　５３，６７７（８．０％）

＜２０１８年＞

有権者数　１，１４６，８１５
投票率　６３．２４％
玉城デニー　３９６，６３２（５５．１１％）
佐喜真淳　３１６，４５８（４３．９９％）

この４年間で、有権者数は２万人近く増加したが、投票率は５％あまり下落した。とくに、地方議員選挙のない都市部で投票率の低下が顕著だった。台風接近という条件を考慮するとしても、全体として知事選に対する県民の熱気が少し冷めてきたと言えるかもしれない。政府与党の県民の声に耳を傾けない硬直した姿勢、様々に暴かれる政治の私物化や腐敗に対する反発・嫌悪感・あきらめ、人口増と世代交代の進行な

ど、様々な要因が投票行動の低下に作用しているのだろう。また票差は徐々に縮小してきている。

世論調査によると、有権者の主な関心は経済、基地、教育であった。２０～４０代の子育て世代において、辺野古新基地の容認の比率が過半を占めるとの調査結果が示されもしたが、経済・教育面でも、中学卒業までの医療費の無料化など玉城県政の４年間の実績と努力は巾広く評価されたといえよう。テレビ・ラジオでは連日、三候補者の政見放送が流されたが、その内容でも玉城候補が優れていた。各地の運動量でも勝っていた。県庁前の数度の決起集会には千人を超える支持者の熱気があふれた。

沖縄県政を自民党には任せられないとの県民意思。

自公候補の主張の重点は『危機突破！』であった。つまり、沖縄振興予算は減る一方、一括交付金は８年前に比べて１０００億円減額。これは県の不作為がもたらした県政危機というのである。沖縄振興予算や一括交付金の減額は他でもない自公政府が行なってきたことだ。辺野古反対・普天間閉鎖を公約として掲げ続け決して中央政府に屈服しない玉城県政に対する悪質な嫌がらせであり、知事を選んだ県民に対する恫喝だった。

『県政不況』キャンペーンは、１９９８年の大田知事の三選を阻むことに成功したが、今回は失敗した。二匹目のドジョウはいなかった。政府自民党による玉城デニー知事に対する、したがって沖縄県民に対する悪意は露骨だった。来年度沖縄関係予算要求額は、沖縄県が求めていた３２００億円から４００億円低い約２８００億円とされた。琉球新報によると、沖縄自民党の西銘前沖縄北方担当相は、８月の岸田内閣の改造で退任するにあたって『前年より１００億円ほど引いたらどうか』と官邸側に伝えていたという。官邸はそれよりさらに１００億円減額した要求額を組んだのである。

政府自民党と旧統一教会との癒着が全国的に大問題となる中、沖縄でもかねてから詐欺まがいの霊感商法や信者の生活破壊が問題となってきたが、沖縄自民党の県議や保守系首長の旧統一教会との結びつきがクローズアップされた。琉球新報は、全県議と全市町村長に対し、『教会関連イベント・集会の参加』『教団や関連団体からの選挙協力』などについてアンケートを実施し紙上に公開した。とくに、佐喜真候補は宜野湾市長時代から結びつきが深く、韓国に出かけて関連イベントに出席したり、今回の知事選の選挙母体の幹部がほとんど関係を持っていたりしていた。この面でも県民の拒否反応が働いたと思われる。

なお、４人が立候補した県議補選はオール沖縄の上原快佐さんが当選した。その結果、県議会の構成は議長を除いて再び、県政与党が２４対２３と、一議席差の多数を占めることになった。

次は１０月２３日投開票が予定されている那覇市長選挙である。県議を辞し立候補を表明した翁長雄治さんの必勝をめざしたい。　（写真、言葉は編集部T.O）

沖本裕司（ひやみかち・うまんちゅうの会）

玉城デニーさんの言葉☛とうーぬいーびや ゆぬたきやねーらんどー　:「みんな違って、みんないい」母から教えられた言葉です。私は、困難に寄り添い、支援の手を差し伸べ、自分らしさが尊重され、安心して暮らせる沖縄をつくりたい

私たちは本気で戦争を止めようとしているのか？

―「戦争展」を通して見る日常と沖縄戦場化の危機との乖離―

山崎ひろみ（静岡・沖縄を語る会共同代表）

ロシア・ウクライナ戦争さなかに開く「戦争展」の意味は？

"恒例行事"で戦争阻止は伝えられたか？

日本の８月、毎年恒例、８月 15 日前後には各メディアで戦争関連企画が流される。今年もいくつかを目にしたが、「以前より少なくなった」という声も聞かれたのは、テレビなどのそうした企画は多くが深夜に追いやられているためかもしれない。また各地で「平和展」や「戦争展」もさまざまに開かれた。２月 24 日に引き起こされたロシアのウクライナ侵攻が現実にあり、その惨状が世界に伝えられ続けているという異常な事態のなかで。21 世紀にはありえないはずの主権国家間の戦争、国連憲章も安保理も無能ぶりを露呈したまま、依然として戦争は止まらない。止められないのか、止めないのかは不明だ。

過去の戦争と現実の戦争を同時に伝える

そんな中、筆者が関わる静岡県富士市の「平和のための富士戦争展」も開催した。今年のテーマは「戦争やめて！　平和な世界を」で、ロシアがウクライナに侵攻した現状に抗議声明を出し、主催団体が「核兵器廃絶平和都市宣言」により生まれた市民団体であることから核兵器廃絶を訴え、原発への攻撃にも強く抗議した。コロナ禍で減ったが、今年も６日間で 1251 人が来場した。会場にはウクライナと地元富士宮市の子どもたちが平和を願って描いたピカソのゲルニカにちなんだ巨大絵画「キッズ ゲルニカ」も展示した。

◆ ウクライナの子どもたちのキッズ・ゲルニカ

従来は、20 世紀までに日本が起こしたアジア・太平洋戦争の実相を中心に紹介する内容だが、今年は過去の戦争に加え、現実に起きている戦争についての展示にも取り組んだ。ウクライナの歴史、ロシアとの複雑な関わり、核施設への攻撃は市民の会の注目するところで、広島の原爆の被害とあわせて展示、広島の高校生たちが被爆体験者から聞き取りをして描いた絵画は、今回も来場者の目をひき、特に子どもたちがじっと見つめる姿が連日みられた。

沖縄戦の惨状はウクライナと同じ

沖縄の展示のタイトルは「本土復帰 50 年―沖縄は本当に返還されたの?」。展示は 77 年前の沖縄戦の惨状に始まり、米軍の無差別攻撃が現在のウクライナの惨状と同じであることを伝え、その後敗戦で沖縄は米軍に占領され、日本から切り離されて異民族の過酷な支配を受け、20 年後ようやく日本に復帰した経緯をたどり、人々の悲願「基地のない平和な島」は 50 年後の現在も叶えられていない、これは本当の返還といえるのか、と訴える内容とした。

◆ 沖縄の現在の問題についても展示

戦争「展示会」の限界を超えるには

ボランティアの高校生たちも会場運営のサポートや展示物での学習などに参加した。見終わってのアンケートには、「教科書では学べない深い歴史」「身近な地域に残る戦争の傷跡の存在」「同じ地域の同世代の戦争体験」などに驚く様子が記されていた。しかし、市民の声の中には「もう一つ物足らない」「心に響かない」という声も寄せられていた。それは、主催する側の〝生煮えのスタンス〟を指摘したものに他ならない。到底、戦争を止めるだけの力はないにしても、限界があるにしても、恒例行事の域を出る努力が必要だ。

会場で、平和の大切さ、戦争の悲惨さを学んでも、一歩会場を出ると、そこには戦争を「非日常」とした平穏な日常があり、ウクライナの現実とはかけ離れたカッコつきの「平和」がある。その乖離のため、たとえ、遠くの空を米軍のオスプレイが飛んでいても、一見平和な日常の中で、どれほどの人が戦争への危機感を感じるだろうか。まさかこの日本がウクライナのようになるとは、まったく考えてはいないだろう。

来場者が記したアンケートの文面には、「ウクライナ」の文字がそこここに見られた。やはり、世界から配信された凄惨な映像は、どこまでが真実かはさておき、戦争の実相として若い世代にも届いていたことが窺えた。

「戦争になったら」でなく「戦争になる前に」

「戦争展」で多くのことは望めないが、『戦争になったら、国や家族を守るために戦争に行く、あのウクライナの人たちのように』と戦争を肯定する方向へ向かわせない為に、戦争に加わることでふるさとの戦場を拡大させないために、さらには武力で平和は作れないことを知らせる為に、いま大人にはやらなければならないことがさらに明確になったはずだ。軍拡に血眼になっている大人たちの影響を食い止め、『戦争になったら』ではなく、『戦争になる前に』『戦争にさせない為に』何をするかを考える、あの沖縄戦やウクライナの惨状を、原爆の被害の実情を、とにかく伝える。

繰り返される人間の愚行の前で、一つ一つの「戦争展」が、次世代に対しての大きな責任を負っていると思う。平和の取り組みを『免罪符』にすることなく、休まずに、諦めずに取り組み続けなければならない役割を再認識しなければならないのではないか。

◆ 展示内容の説明を聞く高校生たち

◆ 夏休みの家族連れが目立つ会場

空自、ドイツ空軍と共同訓練 ネット上にみる国際

ロシア・ウクライナ戦争下で、さらに激化する県東部地区の日米共同訓練

基地を抱える東部地域の不安は続く

こうした、ささやかでも戦争を直視し、平和の大切さを若い世代に伝える取り組みがある一方で、陸上自衛隊の駐屯地や東富士演習場、北富士演習場、そして米海兵隊のキャンプ富士を抱える同じ県東部地区の御殿場市、裾野市、小山町の一帯では、自衛隊と在日米軍による訓練が、演習場使用協定違反の共同訓練化しており、軍用機の飛来も激化している現実がある。

実弾演習の爆音や低空飛行する軍用機の撮影などから、潤沢な補助金はあるものの、事故への不安や有事で攻撃対象となる危機感を住民は抱いている。こうした状況下で、市民による監視活動が昼夜続けられている。これまでも紹介した「オスプレイに反対する東富士住民の会」の活動がそれだ。

オスプレイ初飛来から監視行動を継続

2012年に沖縄に配備された米海兵隊の垂直離陸機MV-22オスプレイが2014年にキャンプ富士に飛来して以来、事故が多発する構造的欠陥機との認識から同会の住民らが常時監視活動を行っている。オスプレイをはじめとの機種がどこから飛来したか、基地の使用上の協定を遵守しているかなどの監視も行い、違反に対しては地権者や自治体に対して即要請文を提出するなどの活動を行っている。

8月、横田基地に配備されキャンプ富士にも飛来する米空軍のオスプレイCV-22が事故多発のため全機地上待機となったが、不具合の原因を究めながらも早々に通常運用を再開、陸自オスプレイや米海兵隊の同型機MV-22オスプレイも同様に早々に訓練再開したことを受け、同会では、構造的欠陥は未解決だとしてオスプレイ全機種の東富士演習場とその周辺への飛来を中止するよう防衛省に要請することを求める要望書を2市1町や地権者に対して提出したばかりだ。

さらに、8月28日から9月4日まで東富士で実施された「104訓練」の監視活動も実施した。「104訓練」とは、沖縄県道104号線越えの実弾射撃訓練を本土に分散移転して実施しているもの。東富士では前回は2020年10月に実施された。詳細は、同会の承諾を得て、訓練内容のまとめを別稿として掲載しているので参照されたい。

"ふるさとが戦場になる危機"は自衛隊ミサイル部隊配備で沖縄でも

沖縄の民意は「基地の無い平和な島

9月11日の県知事選は辺野古新基地建設反対の玉城デニー知事の再選が選択されて沖縄県民の民意がまた示された。政府は無視し続ける。本土メディアの「県民の辺野古反対は根強い」との伝え方に「驚き」のニュアンスを感じたのは筆者だけだろうか？驚く必要はない、50年前の復帰時の県民の願い「基地のない平和な島」は依然として達成されていない。その思いは50年後も全く変わっていない。にもかかわらず、琉球弧の島々に続々と自衛隊員が降り立ち、駐屯地、ミサイル部隊、弾薬庫などが建設され、米軍と一体化の共同訓練を強化、本

来の「専守防衛」を蹴散らして軍拡に走る光景を見せつけられているのが沖縄だ。

あろうことか沖縄戦の犠牲を強いられた島々で。

「命どう宝の会」への賛同を！

ふるさとが戦場になる、これは沖縄に限ったことではない。有事となれば、本土も離島もなく、無差別に攻撃され戦場になることは、あのウクライナで明白だ。本土だけは安全、とはいえない。にもかかわらず、政府は敵基地攻撃能力などと称して軍拡に血眼になっている。米軍との一体化により、自衛隊が先兵として第１列島線上の琉球弧の島々を死守する、その後に米軍が参戦する、という戦争計画がが作られている。すでに島々には"標的"が続々と造られ、一方で住民は置き去り、明確な避難計画も無い事態だ。理不尽この上ない。本土メディアはほとんど伝えない。改めて、二度と沖縄を戦場にしないという唯一の目的で作られた「ノーモア・沖縄戦 命どぅ宝の会」への賛同を呼びかけたい。個人参加の活動だが語る会はこの活動を支持している。なぜ、沖縄の人々が、この会を作らなければならないのかを本土の人間は考えるべきだ。台湾有事を煽られて、自衛隊の誘致を喜ぶシマンチュがほんとにいるのだろうか？　他人事ではないはずだ。私たちは本気で戦争を止めようとしている？

9月17日、沼津・今沢（沼津海浜訓練場）海岸での日米共同訓練

◆日米共同（輸送特別）訓練が沼津・今沢海岸で行われた。その目的は「日米同盟の抑止力・対処力にあり、「対中抑止」の壁となる米軍軍との相互運用性の向上が図られている。

▼佐世保基地所属のドック型揚陸艦ラシュモアは、上陸用舟艇LCUを搭載

何と今度は　∞　≪先島に避難シェルター　政府検討　有事を想定≫　∞　またも「捨て石」か

これは政府が台湾海峡や南西諸島での有事を想定し、先島諸島などで住民用の避難シェルターの整備を検討していることが９月に判明した。「国家安全保障戦略」で国民保護の充実を記すという。ここは、自衛隊と米軍のミサイル基地化によるミサイル戦の戦場になることを意味している。「シェルターの装備は軍と行政と住民が『共生共死』を強いられた沖縄戦と同じ流れで、７７年前の教訓から何も学んでおらず怒りを感じる」と反発の声が上がっている。

大弦小弦

株式会社シェルター（大阪府）は社名の通り、核攻撃に備えるシェルターを扱う。１８０万円の空気清浄機型から１千万円の地下設置型まで。沖縄からも問い合わせがある▼危機をどう見積もり、お金を出すかは個々の判断だ。しかし国営のシェルターは対外的な意思表示になる。国が先島諸島で建設を検討していることが分かった▼シェルターは南大隅第一小学校の校庭にも二つある。米軍機部品落下事故の後、国が造った。この貧弱な構造付き施設が、南大隅町住民を米軍に従わせ続け、学校上空の飛行を見過ごし続けるための免罪符になった▼ミサイルに備えるというシェルターも、「国民保護に手を尽くしたのだから」と国が戦争に踏み切る免罪符にならないか。宮古島や石垣島で各５万人もの住民や滞在者を収容できるのか。それとも「選別」を前提に小さく造るのか。疑問は尽きない▼島々にミサイルが飛んでくる恐れは、自衛隊のミサイル部隊が来たことで確実に増した。シェルターも、対峙する中国には戦争準備の一環と映るだろう。形だけの国民保護策は危機をあおり、偶発的衝突の危険を高めるだけ。本当に保護を追求するなら、緊張緩和に全力を注ぐべき時だ▼戦争が始まってしまえば保護など存在しない。沖縄戦でガマに身を潜めた体験者たちが、教えてくれた。（阿部岳）

沖縄タイムスより

東富士18巡目「104訓練」のまとめ

2022.9.9　米軍は東富士に来るな出て行け静岡県民の会　訓練場平和委員会

1.　「104 訓練」監視活動のまとめ　　2022.8.28～9.4

日	曜	時間外 ※2	開始時刻 ※1	初弾	午前 7-12		午後 12-17		夜間 17-22 ※3		合計 ※3		最弾	終了時刻 ※1
					総数	白煙弾	総数	白煙弾	総数	白煙弾	総数	白煙弾		
28	日		9:51	小火器訓練のみ										15:58
29	月		8:34	8:34	20		38		α	β	53+α	β	?	21:57
30	火		7:53	7:53	59		30		35	3	124	3	21:25	21:43
31	水		7:15	7:27	60		39	2	36	12	135	14	19:47	19:55
9/1	木	3	8:37	8:06	42		41		30		113		21:34	21:43
2	金		8:08	8:08	21	8	27		35		83	8	21:47	21:54
3	土		7:16	7:17	60		38		0		98		15:03	15:56
4	日		7:10	7:15	115		小火器訓練				115		9:01	15:35
合計					317	8	208	2	135+α	15+β	721+α	25+β		

※1　開始時刻と終了時刻は、南関東防衛局から関係自治体に送信されたメールによる時刻

※2　開始時刻前及び終了時刻後に撃たれた米軍による最弾の数(104 とは別の部隊)

　　(　)内は白煙弾の数(内数)。

※3　表中「α」「β」は監視終了後の砲撃で数不明

2.　東富士 18 巡目「104 訓練」の特徴と問題点

(1)　今回は、2013 年実施と同程度の中隊規模で、兵員 330 名(実動は 240 名、車両 70 両、榴弾砲 6 門というものでした。砲撃総数は 721 発＋α(内白煙弾 26 発＋β)で、中隊規模の訓練としては最大でした。

(2)　6 門の榴弾砲は、初日 28 日の午前 6 時頃に射場に搬入されたことが後にわかり、初日は「小火器訓練」と並行して、通信機器等の搬入が行われ、砲撃の準備に充てられました。

(3)　今回も前回(2020 年 10 月実施の 17 巡目)と同様に実弾演習に同じ場所で「104 訓練を実施していない時、米軍が使用」となっており、5 日目(9 月 1 日)訓練開始の 8 時 37 分以前に別の部隊による榴弾砲が 3 発撃たれました。訓練期間内であると「104 訓練」なのか別の米軍なのか区別がつきません。また、8 日間のうち 5 日間も夜間訓練を行い、4 日間は 22 時近くまで行いました。地元からの「午後 8 時まで」の要請は無視されてしまいました。「使用調整」運用委員会での協議が形骸化されてしまいます。

(4)　今回も前回同様に自衛隊は畑岡射場で朝霧国と相関係の訓練を連日行い、同じ砲弾地に榴弾砲を撃ち、白煙弾と思われる最弾も確認されました。これまで米軍と自衛隊は別事訓練の時間をずらしていたが、今回から同時に訓練が行われ、まるで「日米共同訓練」のようです。「104 訓練」の時には、紛らわしい訓練は行うべきではありません。

(5)　今回の訓練で、富士 7 0 両について視察団を通じて、南関東防衛局に問い合わせたところ、「今回は HIMARS は参加していない」回答を得ました。

「104 訓練」で着弾する白煙弾(2020 年 10 月)

自衛隊迫撃砲による白煙弾?(2022.8.29)

3. 「104 訓練」監視活動の反省

(1) 8 日間で延べ 52 名の参加があった。連日、天候が悪く雨の中の監視活動となりました。

(2) 今回の監視活動では、地元での取り組みが困難で 4 名だけでしたが、県内各地から 27 名の方が参加してくれたため、乗り切れました。

(3) 当初「夜間訓練」の監視活動を諦めていましたが、地元の会員から「夜間は家で砲撃音を数える」という申し入れがあり、これに甘えて、都合のつかない日を全県に呼びかけ夜間訓練の監視活動を実施することができました。伊豆から 2 日、静岡・磐田から泊りがけで 2 日参加してくれました。

(4) 監視活動は「綱渡り」の状態です。県民の会を構成する各団体で、「監視活動」の意義、日米の訓練の実態を広く知らせる意義、世代的継承などを論議して、監視活動により多くの参加をお願いしたいと思います。

九・二二　辺野古座り込み三〇〇〇日　菅原文子さんがエール！

亡き夫（故菅原文太さん）が今の辺野古新基地建設の状況を見たら、怒りに震えるだろう。（略）私自身は辺野古の現場に足を運べずにいるが、常に沖縄を思い、沖縄について話している。貴重な自然豊かである大浦湾には、軟弱地盤があることが分かった。技術的に完成が不可能な新基地建設は税金の無駄遣いにほかならない。（略）復帰直後の沖縄の様子で、今も鮮明に思い出すことがある。コザ騒動にも参加した上原安隆さんが2018年、国会議事堂正門にバイクで突っ込んで衝突死した。沖縄の置かれる状況に抗議したかったのだろう。沖縄の人々の闘いはその時代からずっと続いている。辺野古のゲート前での座り込みも三千日を迎える。現場の人々の姿勢は、日本全国民が見習うべきだ。継続こそ、最も説得力があり、信頼につながる。正しき者は強くあれ。座り込む皆さんの背中には、心ある多くの国民の思いが乗っている。（略）玉城デニーさんが圧勝したのも、そのことを示している。辺野古問題は沖縄の問題ではない。米軍が沖縄にこれだけの基地を展開しているのは、世界の非常識だ。日本は米軍基地問題を都合良く沖縄に閉じ込め、戦時中に沖縄を捨て石にした時と、同じことをしている。『政府の役割は民を飢えさせないこと、絶対に戦争をしないこと』。生前に夫が言った言葉を改めて強調したい。観光などの沖縄の明るい面にだけ目を向け、基地問題からは目をそらす。こんな政治に「NO」を突き付けよう。政府の姿勢を変えるには、全国民で辺野古を考えることだ。そのために私も沖縄を思い、強く訴え続ける。新基地建設を止めよう。

（談）

無理せず抵抗続ける

9. 22:シュワブ・ゲート前

沖縄から・・・台湾有事を想定する南西諸島の軍備強化の実態

富田英司（静岡・沖縄を語る会）

中台間の緊張を煽る日米政府は与那国島、石垣、宮古、沖縄、奄美、馬毛島の島々にミサイル基地や自衛隊駐屯地を配備し「台湾有事」を口実に戦争準備へと突き進んでいる。以下は「ノーモア沖縄戦命どう宝の会」からの報告である。

防衛省は「過去最大の5.6兆円」を概算要求。中国にも届く「長射程ミサイルル量産」、中国のミサイル兵器の高度化に対抗し、浜田防衛相は「反撃能力も選択肢」とし、防衛省は迎撃不能な極超音速ミサイルの開発に踏み込む。産経新聞（9月1日）は「長射程ミサイル１５００発以上整備」と報じた。南西諸島がミサイル列島化し、中国とのミサイル戦争に陥る懸念が高まるばかりだ。

２８日、熊本の共同訓練では米陸軍が対戦車ミサイル「ジャベリン」、陸自も同種の武器で実射訓練を実施した。「ジャベリン」は米軍が供与しウクライナの戦場映像で目にする。３１日は奄美で陸自、米陸軍が共同訓練を行い、ウクライナにも供与する高機動ロケット砲システム「ハイマース」が米本土から初めて持ち込まれた。両訓練は「離島防衛」を名目に対戦車の地上戦、奄美では、宮古、石垣、沖縄本島うるま市に配備される陸自１２式地対艦ミサイルも連動し「離島へ侵攻する敵艦を阻止する対艦戦闘」（産経新聞）の訓練を繰り広げた。まさに実戦さながらだ。

南西諸島の島々の「離島防衛」、奪われた島を奪い返す「離島奪還」を名目に日米が実戦訓練を重ねている。「防衛、抑止」と称する軍備増強は、射程１０００キロ超の中国本土攻撃能力の保有を伴って中国のミサイル強化を呼び込むことにならないか。

琉球新報社説（８月３０日）は「抑止力が戦争準備と同義になっているのではないか。抑止力と引き替えに南西諸島は標的となり、戦場になる危険を背負わされるのか」と強く批判した。同社説は浜田防衛相が「台湾有事の際に沖縄県民の島外への避難が必要になった場合、自衛隊の航空機や船舶で輸送する」としたとする発言を取り上げ、「県民は避難や救助が必要になる事態を望まない。政府は平和構築にこそ取り組むべきだ」と主張した。

南西諸島の「日米共同作戦計画」報道（共同通信）で自衛隊幹部は「自衛隊は米軍支援を最優先する。住民を避難させる余裕はまったくない」と述べる。

住民全員の避難のため宮古島市で必要な航空機数を３８１機と試算、石垣市は一日４５機運航しても「９．６７」日を要するとの報道があった。４００機近くの飛行機が必要で、１０日もかかるというのだ。有事となれば空港が真っ先にやられるという指摘もある。有事下の避難は非現実的だ。

「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」は在日米軍が参加する災害訓練を実施しないよう求める文書を玉城デニー知事に郵送した。抗議表明を込めた「災害訓練不実施要請」である。

米軍指揮下で戦争ができる自衛隊に

あのハイマースを持ち込んでの訓練

「土地利用規制法」（住民監視法）が9月20日より完全実施

第1のターゲットは琉球・沖縄だ！

９月２０日、自衛隊基地など安全保障上重要な施設周辺などを対象とする「土地利用規制法」が全面施行された。米軍基地が集中し、自衛隊の基地建設が進む沖縄・琉球弧での影響は大きいといえる。政府の本音は、基地や原発周辺の土地を外国人の買い占めから守るなどの口実で（それが虚偽であることは国会答弁で露呈）、周辺住民や反対運動を行っている市民を恣意的・強権的に調査し、命令に従わねば罰則を与えるというものなのだ。昨年の沖縄タイムス紙では「この法律は、中国との関係で重要性を増しているこの琉球弧の軍事施設が邪魔されないようにと、これらの国境離島に住む住民全部を調査し、監視し、規制しようということである。…こうしてこの法律は、戦争施設などの周辺や国境離島から基地監視活動や基地反対運動をする住民を排除して基地の中を国民の目から覆い隠し、これらの活動をする者を『安全保障に反する者』として規制することで、戦争する国づくりを進める」（2021年10月21日）と警鐘を鳴らした。　同法は防衛・海上保安庁など「重要施設」の周囲１キロや、国境離島を「注視区域」に指定し、土地の利用状況調査を可能とする。司令部機能を持つ基地など、特に重要な施設は「特別注視区域」とし、土地利用の規制、個人情報の調査も行われる。また、法律の条文には調査に関する縛りもなく、対象が際限もなく拡大されかねない。刑罰も課されている。それこそ「住民監視法」であり、「現代の治安維持法」だと言っても過言ではないだろう。他人事ではない。警戒を怠ってはいけない。

社説　土地規制法全面施行

根拠なき悪法は認めない

安全保障上、重要な施設の周辺や国境離島を対象とする「土地利用規制法」が20日に全面施行される。規制対象区域では土地の所有者や国籍の調査が可能になり、国民のプライバシーが侵害される。

米軍基地が集中し、国境を接する沖縄には深刻な影響がある。そもそも土地規制法は立法の必要性を裏付ける根拠のない悪法だ。制限なく国民の権利を侵害することが明白な法の全面施行は決して認められない。

全面施行後、政府は自衛隊基地・駐屯地や原発周辺の土地、領海の根拠となる国境離島を対象区域に指定する。沖縄でいえば、辺野古沿岸で自衛隊が発着する那覇市、米軍基地の集中する本島中北部、自衛隊新設が建設され、国境離島でもある宮古、八重山地域はほぼ全てが含まれる。

全面施行の閣議決定と同時には、まとめた基本方針では、勧告や罰則付きの命令が出せる妨害行為として、調査拒否の発射やレーザー照射のほか、航空機撮影に障害となる工作物設置を挙げている。

だが法案審議の過程で明らかになったのは、過去にこうした強制措置が国内で適用された例はないということだ。規制が必要とされる事実がないのに、新たに住民に義務付ける必要性は全くない。例えば建物の高さ制限であれば、航空法などで規制がある。

沖縄でいえば、名護市辺野古の新基地建設に当たり、沖縄工業高等専門学校の校舎などが米軍の高さ制限を超えているが、日米の協議で適用除外となった。つまり政府のさじ加減でどうにでもなる。

法の目的は別にあるのではないかと疑念が募る。２０２１年６月の参院内閣委員会参考人質疑で、馬奈木厳太郎弁護士が述べたように「安全保障の名目で（市民を）監視に置く趣旨」が見えるからだ。

対象となる土地所有者の調査には、公安調査庁などの情報提供や協力することも条文上は可能だ。分析のため、これら機関への個人情報提供もあり得るとしている。

政府は22年6月の参院内閣・防衛委員会による連合審査では、個人の思想信条を調べることも「排除されていない」と答弁した。

自民党のお田太郎参院議員（比例中国ブロック）は辺野古新基地建設に反対する市民団体にも、土地規制法の拡大適用を求めたことがある。政府の基本方針で、基地周辺の集会開催を規制しないのは「私有地」に限定している。公道上など私有地でなければ、参田氏が言うように正当な市民の行動も制限できるのだ。

施行後の焦点は地方自治体からの意見聴取だ。規制区域指定へ向け、各自治体に住民の権利を守れるか、という観点からの判断を期待したい。

思想信条の調査まで含む土地規制法を無条件に受け入れることは、憲法が保障する基本的人権の侵害を認めることと同義だ。政府への自治体責任があってはならない。

琉球新報 2022年9月15日(木)

大石恒雄（静岡・沖縄を語る会）

「でもね」と続ける。「僕が歌っているのは、94年前のことではなく、今の日本のこと。事件は過去のことでも現在と未来のことを歌っているんです」「歴史修正が恐ろしい」日本フォークソングの始祖、中川五郎はだから歌い続ける。かつて朝鮮人虐殺が起こった現場で、彼は語った（木村元彦さん）

五郎さんに痺（しびれ）れちゃう　・・・・五郎さんからのメッセージ

「中川五郎を静岡に呼ぶ会」が主催するコンサートで、静岡市に歌いに行くのは今回が二度目となる。最初は2018年12月15日のことで、会場は葵区御幸町にあるサールナートホールだった。そして今回の二度目は2022年7月16日、会場は葵区七間町にあるMIRAIE リアン　コミュニティホール七間町に変わった。二回目はちょうど三年と七か月ぶりとなる。

何だか自画自賛になってしまってかっこ悪いのだが、2018年12月のコンサートはほんとうにいいコンサートになったと思う。ぼく自身思いきり歌えたという満足感があるし、これまた自画自賛に羽根が生えてしまうのだが、聞きにきてくれた人たちや主催者の人たちの反応を見ていても、ほんとうにいいコンサートになったんだなと感じずにはいられなかった。

そんなわけで二度目のコンサートもどうしても前回と同じようにいいコンサートにしたい、もっといいコンサートにしたいという気持ちになってしまう。でもだからといってうまくいったと思える前回と同じような内容にはしたくない。三年と七ヶ月でぼくはこれだけ変わりました、少しは前に進みました、ということを静岡のみんなにしっかり伝えられるような新しい内容のコンサートにしたい。

7月16日当日、静岡に着いて、会場のMIRAIE リアン　コミュニティホール七間町に行き、午後2時からのコンサートが始まるまで、主催者の人たちから、どんな内容にするのか、どんな進行にするのか、演奏時間も含めて具体的に指示されることは一切なかった。全幅の信頼を寄せられていることが伝わってきてほんとうに嬉しいかぎりだったが、すべて自由にやれるということは、すべての責任はぼくにあるということでもあり、その重みを十分受けとめて、この日の演奏曲を選んでいった。

2018年12月15日のコンサートは途中で休憩を挟んで全部で14曲。今回は休憩を挟まずぶっ続けで12曲。嬉しいことにアンコールが来たので、もう一曲、全部で13曲歌った。もちろん前回のコンサートでも歌った「一台のリヤカーが立ち向かう」もまた歌ったが、今回はどうしてもその後作って歌い始めた新しい歌を中心にした選曲にしたかった。それで最近次々と作り始めた、新聞記事をもとにして、そこで取り上げられていたできごとや人物のことをそのまま歌にする「新聞記事をそのまま歌にするシリーズ」の曲、青森の五所川原で笹もちを作り続ける95歳のおばあさんの歌「ミサオおばあちゃんの笹もち」や東日本大震災の時に支援部隊の一人として被災地に行き、

その後京都でカレー屋さんを開いた元刑事の歌「吉野さんの霊山カレー」、それに今年春に起こったスリランカの民衆の抗議デモのことを歌った「図書館でデモをする、図書館がデモをする」（抗議運動の結果スリランカの大統領は国外逃亡して辞任した）などを歌った。これらの歌はほんとうに新聞記事をそのまま歌っているので、作詞者はぼくではなく記事を書いた新聞社の人たちだ。

今も続いているロシアのウクライナ侵略に関しては、言葉が人を救いもすれば人を殺しもすることを歌った「パリャヌイツャ」やカナダのシンガー・ソングライター、バフィ・セント・メリーが1964年に発表した「ユニバーサル・ソルジャー」を日本語にしたもの、それにチリのヴィクトル・ハラの有名な曲「平和に生きる権利」を自分なりの日本語歌詞にしたものなどを歌った。

また20分に及ぶ長い物語歌も、1968年のメキシコ・シティ・オリンピックの表彰式でブラック・パワー・サリュートをした二人のアメリカの黒人選手に共鳴したオーストラリアの白人選手のことを歌った「ピーター・ノーマンを知っているかい？」と、関東大震災の時の自警団員たちによる虐殺事件を取り上げた「1923年福田村の虐殺」を歌った。ぼくは福田村の事件を13年前に森達也さんのエッセイを読んで初めて知り、それで歌にしたのだが、その森さんの監督で事件が劇映画化されることになり、今話題となっている。映画はこの8月に撮影が始まり、来年9月全国公開の予定だ。

「中川五郎を静岡に呼ぶ会」主催のコンサートは、会のメンバーの多くが「静岡・沖縄を語る会」で活動されている人たちということもあり、2018年12月15日の一回目は「辺野古新基地反対・砂田嶽さん支援」、2022年7月16日の二回目は「辺野古新基地反対・玉城デニーさん支援」のスローガンが掲げられていた。そこで今回ぼくは沖縄の歌として、2016年春に沖縄県うるま市で起こったアメリカの元海兵隊員による女性殺人事件を取り上げた「まぶいぐみ」を歌った。この歌でぼくがいちばん歌いたいことは、本土の多くの人間が同じ国の沖縄のことを「よそごと」として捉えていることで、それは昔からずっと、戦争が終わっても、沖縄が「本土復帰」しても変わることはない。ぼくが沖縄のことを初めて歌ったのは、1968年春、復帰前の沖縄を訪れて作った「俺はヤマトンチュ」だったが、その歌でも沖縄のことを「よそごと」、「ひとごと」に捉えている本土の人間、ぼくも含めた「ヤマトンチュ」のことを歌っていた。54年経っても状況は変わることなく、同じことを歌い続けなければならない自分が、ほんとうに悔しく情けない。でももっともっと大きな声をあげたい。

「中川五郎を静岡に呼ぶ会」主催の静岡市でのぼくの二回目のコンサート。今回もほんとうにいいコンサートになったと思う。何だか自画自賛に歯止めがきかなくなってしまっているが、終わった後の打ち上げでのみんなの熱い言葉を聞いたり、嬉しそうな表情を見ていると、そう思えて仕方なかった。「二度あることは三度ある。」三回目のコンサートはいつになるのだろうか？　それがいつであれ、もっともっといいコンサートにすることをぼくは静岡のみなさんに約束する。いつもほんとうにありがとうございます。

（中川五郎：フォークシンガー）

長澤靖寿美（静岡・沖縄を語る会）

▼　五郎さん、ありがとう。共に前へ！

「沖縄は不屈だ!」

静岡・沖縄を語る会の会員がＤＶＤを制作しました。

☛タイトル　沖縄は不屈だ!
☛沖縄・日本の主権を取り戻すために、
　日米地位協定改訂と、
　米軍辺野古新基地建設は許さない！
☛１１分

ロシアのウクライナ侵攻の停戦の兆しもなく、さらに、アメリカの煽りなどにより、中国・台湾の軍事的緊張と、加えて、南西諸島に自衛隊のミサイル基地化が進んでいます。そんな今こそ、平和な世界の構築が急務と思い、静岡・沖縄を語る会の会員としてＤＶＤを作成することにしました。

沖縄の歴史、反戦平和運動に学びたい

内容は、沖縄県作成の沖縄の近代を編集したカラー冊子、日米地位協定の内容と、改訂を訴える白黒冊子、「キャンプ富士」と東富士演習場を網羅したカラー冊子を基に、語る会の信念や、街宣活動。

沖縄が理不尽な扱いを受けている根本的な原因。日米地位協定の問題点と、改訂を訴える取り組みなども入れ、沖縄の１５世紀の統一など、中世の歴史も辿ります。

制作に使われた資料の一部

１９７２年、沖縄は日本に返還されましたが、米軍基地は居座り続け、そして日本政府は、普天間基地の代替えとして、米軍辺野古新基地建設を強行しようとしています。

沖縄県民は、辺野古の是非について県民投票を実施しましたが、結果は７１・７％が辺野古反対でした。沖縄の民意は踏みにじられています。

アメリカ統治下もしかり、返還後も、不条理の状態に置かれている沖縄。私たちは沖縄の置かれている現実をもっと知る必要があると思います。

ＤＶＤには、ナレーションとテロップ、音楽も入っています。ぜひ鑑賞してください。連絡は「静岡・沖縄を語る会」へ。

佐野雅之　（静岡・沖縄を語る会）

新しい仲間を求めて ∞ 共に学び合う場 ∞ 沖縄情報館

増田千次郎（静岡・沖縄を語る会）

国葬問題と旧統一教会問題が騒がしい近頃だが、何か次元の低い情報が飛び交っている感である。一方、ウクライナ情報は少なくなったとはいえ連日ニュースになっているが、ミャンマーのニュースは聞こえてこない。

沖縄県知事選にはほっとしたが、「オール沖縄」の弱体化は心配である。南西諸島への自衛隊配備問題も影を落としている。

さて、憂いているだけでは始まらない、と我が「語る会」も少々、これまでと異なった活動に踏み出した。と言うのは、沖縄から 1,000 km以上離れた静岡での活動で一番気になる事は、本当に沖縄を知っている市民が何人いるのか、況してや辺野古は如何に、である。今時の高校生には「アメリカと戦争したの？」と言う事も、それほど奇異ではない、と聞くと、沖縄戦の悲劇もない世界観に、「ヌチドゥ宝」は本当に仲間内の話以外の何物でもない、とは言い過ぎだろうか？　沖縄も辺野古も外国の事である、と言い過ぎだろうか？

そこで、今まで関わった方々を切り捨てて、とは言わないが、まず、沖縄を知っていただく活動を始めた。沖縄の社会問題のみではなく、文化、歴史、自然、習慣、言語等を含めて、本土と同じ事、違う事、多方面から沖縄の情報をより多くの市民に知らせる「店」を構えたのである。提供の情報には沖縄旅行も含んでいる。間口 4m、奥行 7m 程の繁華街の店舗の壁に、夫々の情報のパネルを１月サイクルで掲示している。毎週木、金曜日の昼から夕方まで、「沖縄情報館」を開館している。９月の成果としては内部展示を観た方（23 日まで）は３名、外のテレビを見た方が 5 名程であるが、順調な出発と感じている。又、情報提供コーナーを用意し、如何なる情報でも提供を望む方には情報を提供する、ボードに希望の情報を書けば、翌週と翌々週の開館日にボードで情報を提供する方法である。提供情報は沖縄在住の仲間からもいただくシステムである。

静岡市内北街道沿いの「セノバ」筋向かいの小ビル１階に立ち寄り、ご意見も頂きたい。

この活動は全く新しい若い方々に「なぜ？」を知らせ、彼等の望む活動方法を共に模索する事が第一義である。旅行の斡旋は少しでも「オール沖縄」支援と考えている。これが上手くゆけば、本土各地に情報館活動を広げる事も視野にある。明確な手応えがある活動ではないが、次への活動を生む、それがこの活動と異なっても、何かを掴めればと、願う。

沖縄情報館で「沖縄復帰？50年」写真展

写真展「沖縄復帰？50年」

少し前になりますが、５月１５日沖縄の「日本」復帰５０年の節目に合わせて、静岡市の中心地（セノバ前の一等地）“ギャラリー集“で開催した写真展は、準備不足もなんのその、ランチに向かう鷹匠ブラの女性たちや泥まみれのじゃがいもを商う元気なおかみさん、対馬丸を寂しげにみつめる写真の少年に想いを馳せる絵描きと多彩な顔ぶれが訪れた。

揚げたてモチモチのサーターアンダギーは大人気で３個入り１００袋完売、ホロッと口中に広がる甘じょぱい黒砂糖も４０袋完売、花丁子さんからの仕入れが追いつかないほど繁盛した。

いつもの駅地下で「ダイジョウブデス」とチラシ配りの我々をすり抜けていく慌ただしい人々の群れと違い、観光で行った沖縄の海やヤンバルの自然の美しさを懐かしみつつ語り南西諸島の軍事化を危惧する少しゆったりした２週間だった。

これら新しい出会いと発見、予感を力に錆びついた思考力と行動力を奮い立たせて静岡に沖縄旋風を起こそう。（小野）

写真展で沖縄の歴史を振り返る（静岡新聞５／１５より）

お世話になった「花丁子」さん。青葉シンボルロード近くに沖縄そばのお店（おぎどう）をオープン！

沖縄情報館・会報へアイデアやご意見をお寄せください。（編集：O）

【集会案内】 第36回団結まつり 命どぅ宝∞多くの人々と交流・連帯を！

☛日　時：**10月23日**　１１：００～１５：００ ☛会　場：東京　亀戸中央公園　☎は「語る会」へ